

## 「日本の家」 2 町家を直す人との対話 1

### 日本の家とまちは、散歩しても楽しくない？

金沢市で、町家を直す仕事をしている建築家、林野紀子さんにインタビューをしました。インタビューは林野さんの家で行いました。

まつだ：林野さんは、どうして建築家になったのですか？

林野：大学の時、美術が専門だったので、いろんな美術館へ行って、世界中を旅行したんですね。そして、たくさんの美術館を見ていくうちに、2つのことに気づいたんです。一つは、自分は美術品より美術館に関心があること、もう一つは日本に帰って、空港から電車に乗って町の風景をみるのがすごくつらかったことです。

ヨーロッパやアジアのいろいろな国へ行っても、日本みたいな「風景のつらさ」を感じる事がなかったんです。でも「日本は電柱や電線がいっぱいで、プラスチックみたいな、すぐに汚くなってしまいうまい捨ての家がいっぱい建っていた。私はそこを散歩したり、そこでお茶を飲む喜びが感じられなかった。それがつらいな」と思った。それで建築の仕事をはじめたんです。少しでもそういう風景をなくす建物とか街のあり方ができないかなと思ったんです。



日本の一般的な住宅地

でもそんな私でも町家の改修に携わるとは思ってなかったです。日本の昔からある風景をなんとかしたいって思ってなかったです。私の周りには、古い町並みというのはなかったんですよ。私

の生まれたところは山梨県で、戦争で古いところがすべて壊されたところです。その後に住んだ東京もそうでした。だから大学では新しい建築ばかり勉強していました。

松田:じゃあ、どうして古い町家を直す仕事をするようになったのですか。

林野:夫の転勤で金沢に来たのがきっかけです。私はそのとき仙台の設計事務所で働いていたんですが、金沢なら住んでもいいと思って、夫について13年前に金沢に来ました。

金沢に引っ越して、まず、町家を借りて住みました。町家はとてもおもしろいと思いました。まず家と道がつながっているのも、町と住人との距離が近いです。寒かったりしますが、季節を味わう楽しさがあります。

そして、金沢に来て5年くらいたったとき、住人が亡くなって空き家になっていた町家を買わないかって話を聞いたんです。町家は今、毎日のように壊されて、新しい家が建てられているんです。町家を直して住みたい若い人はほとんどいません。「私たちが今買わないと、この町家がなくなっちゃう、それはとてももったいないんじゃないか」と思って、買いました。そして、自分で家を直したんです。

それまでは新しい家ばかりつくっていましたが、日本の伝統建築のことは全然知りませんでした。

金沢に来て、はじめて日本の伝統建築の部材の名前とかを知ったんです。

自分で自分の家を直して住んだことで、もっと町家の良さに気づくようになりました。

それ以来ずっと、町家を直しています。

松田:そうなんですね。でも、建築家として新しい形をつくりたいとは思いませんか。

林野:確かに若い時はそうだったんですが、今の私にはそういう気持ちはないんです。おもしろい形を見せたいと考えていません。でもその一方で、「設計する人が線を引くことの責任は消えていない。」って思うんです。たとえば材料の厚さがちょっと違うだけで空間の印象って大きく変わってしまったりするんです。その「ちょっと違うだけ」の積み重ねで、家とか空間も全く変わってしまう。町家という、これだけ形がきちんと決まっているものでも、別の設計者がやれば全く違う町家になるんです。だから一本の線を引く責任みたいなものを感じながら、強い意志をもって線を引ける、そんないい線がひけるようになりたい。それが今の自分の目標です。

松田:林野さんのこの家、確かにいくつか気になるところがあります。たとえば天井の柱は昔の

もので、とても黒いんですが、天井は新しい木なので色が違います。どうして同じ色にしなかったんですか。



林野：新しいところは塗らないという選択をしたんです。なぜかという、私が尊敬している先輩に「今は新しい柱と古い柱の色の差が強いようにみえるけど、30年もたつと全部同じような色になるから。ちょっとだけの間だから塗らなくていいんじゃない？」っていわれたんです。それを聞いて、「そうか。町家っていうのは数十年、数百年の単位で落ち着くものなんだな」と思って、塗らないことにしたんです。

松田：すごいですね。日本の家なんて5年で家の価値が半分になって30年でゼロ円です。100年後に残るように作られていない。

林野：プラスチックとか自然じゃないもので家をつくと、家が商品になって、消費されてしまうんです。買ったときに最高で一番価値が高く、それから価値がどんどんさがってしまいます。残念です。商品ではない家、100年後に残るような家がふえて増えてほしいと思います。



林野さんの家（向かって右から二つ目の小さな家。明治後期、100年以上前の町家を林野さんが改修）

(1948<sup>じ</sup>字)

(2020.12 Written by Makiko MATSUDA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ<sup>さくひん</sup> 表示<sup>ひょうじ</sup> - 非営利<sup>ひえいり</sup> - 継承<sup>けいしょう</sup> 4.0 国際<sup>こくさい</sup> ライセンスの下に提供<sup>もと</sup>されています。この作品を利用する場<sup>ば</sup> 合<sup>あい</sup>は、「たどくのひろば」を出典<sup>しゅつてん</sup>として示<sup>しめ</sup>してください。

例<sup>れい</sup>) 出典<sup>しゅつてん</sup>: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.